



# 婚配式



つねにさいわいをみ満ち まったくいさぎようして かみをうみし  
常 福 全 潔 さぎよ して 神 生



ははや、なんぢはじつにほめらるべし。  
母 爾 實 讚



ヘルヴムのうえにと尊うとまれ、こ光うえいたぐいなくセラフィムに  
上 尊 うとま れ、こ 光 うえ いた ぐい なく セラフィムに



まさり、  
勝



みさおをやぶらずして かみことばをうめり、  
貞 操 破 神 言 生



かみのじつのははなるをもて、なんぢをあがめほむ。  
神 實 母 は なる を も て、 爾 ん ぢ を あ が め ほ む

(聖堂入口に立つ。司祭は前、新郎は右、新婦は左。保証人は新郎新婦の脇。司祭はローソクにて3度新郎新婦を祝福する。新郎新婦、祝福されたローソクを持つ。)

輔祭) 君よ、<sup>きみ しゆくさん</sup>祝 讚せよ、

司祭) 我等の神は恒に崇め讚めらる、<sup>われら かみ つね あが ほ いま いつ よよ</sup>今も何時も世に、



アミン。

輔祭) 我等安和にして主に<sup>われらあんわ しゅ いの</sup>禱らん、



しゅあわれめよ。  
主 憐

輔祭) 上より降る安和と我等が<sup>うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの</sup>靈の救の爲に主に禱らん、



しゅあわれめよ。  
主 憐

輔祭) <sup>ぜんせかい あんわ かみ せい しょきょうかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの</sup>全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱ら

ん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) <sup>こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ ところ もつ ここ きた もの ため しゅ いの</sup>此の聖堂、及び信と慎と神を畏る心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) <sup>きょうかい つかさど そんき われら ぜんにっぽん ふしゅきょう そんき われら せんだい</sup>教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる我等の仙台の

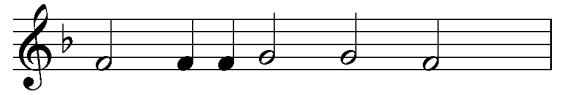
<sup>だいしゅきょう しさい そんびん よ ほさいしよく ことごと きょうしゅう およ</sup>大主教セラフィム、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及

<sup>しゅうじん ため しゅ いの</sup>び衆人の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

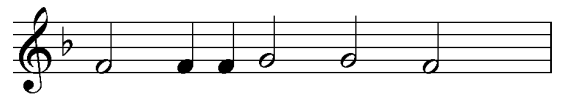
輔祭) <sup>わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの</sup>我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) <sup>いまたがい へいてい かみ ぼく かみ ひ ため およ かれら すくい ため</sup>今互に聘定せらる神の僕(某)と神の婢(某)との爲、及び彼等の救の爲に

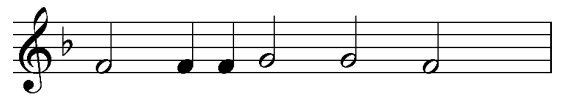
<sup>しゅ いの</sup>主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) <sup>かれら こ たま そのやから けいぞく およ およ すくい せつよう きがん じょうじゅ</sup>彼等に子を賜いて其族を繼續せしめ、及び凡そ救に切要なる冀願を成就せし

<sup>ため しゅ いの</sup>むるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) <sup>かれら かんぜん わへい あい たすけ くだ たま ため しゅ いの</sup>彼等に完全にして和平なる愛と助とを下し賜わが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) 彼等が <sup>かれら</sup> 意 <sup>こころ</sup> の一 <sup>いつ</sup> になると <sup>しん</sup> 信 <sup>かた</sup> の堅 <sup>おい</sup> きとに <sup>まも</sup> 於て守 <sup>ため</sup> らるるが <sup>しゅ</sup> 爲 <sup>いの</sup> に主 <sup>い</sup> に禱 <sup>ら</sup> ん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) 彼等が <sup>かれら</sup> 玷 <sup>きず</sup> なき生 <sup>せい</sup> 活 <sup>かつ</sup> に <sup>しゅくふく</sup> 祝 <sup>ため</sup> 福 <sup>しゅ</sup> せらるるが <sup>い</sup> 爲 <sup>いの</sup> に主 <sup>い</sup> に禱 <sup>ら</sup> ん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) 主 <sup>しゅ</sup> 我 <sup>われ</sup> 等 <sup>ら</sup> の神 <sup>かみ</sup> が、彼 <sup>かれ</sup> 等 <sup>ら</sup> に <sup>とうと</sup> 貴 <sup>こんばい</sup> き婚 <sup>けがれ</sup> 配 <sup>と</sup> と汚 <sup>とこ</sup> なき牀 <sup>たま</sup> を賜 <sup>ため</sup> わるるが <sup>しゅ</sup> 爲 <sup>いの</sup> に主 <sup>い</sup> に禱 <sup>ら</sup> ん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) 我 <sup>われ</sup> 等 <sup>ら</sup> 諸 <sup>もろ</sup> の憂 <sup>うれい</sup> 愁 <sup>いかり</sup> と忿 <sup>あやうき</sup> 怒 <sup>まぬが</sup> と危 <sup>ため</sup> 難 <sup>しゅ</sup> とを免 <sup>い</sup> るるが <sup>い</sup> 爲 <sup>いの</sup> に主 <sup>い</sup> に禱 <sup>ら</sup> ん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) 神 <sup>かみ</sup> よ、爾 <sup>なんぢ</sup> の恩 <sup>おん</sup> 寵 <sup>ちやう</sup> を以 <sup>もつ</sup> て、我 <sup>われ</sup> 等 <sup>ら</sup> を佑 <sup>たす</sup> け救 <sup>すく</sup> い憐 <sup>あわれ</sup> み護 <sup>まも</sup> れよ、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) 至 <sup>し</sup> 聖 <sup>せい</sup> 至 <sup>し</sup> 潔 <sup>けつ</sup> にして <sup>いた</sup> 至 <sup>さん</sup> りて <sup>び</sup> 讚 <sup>われ</sup> 美 <sup>ら</sup> たる我 <sup>こう</sup> 等 <sup>えい</sup> の光 <sup>ちよ</sup> 栄 <sup>さい</sup> の女 <sup>しょう</sup> 宰 <sup>しん</sup> ・生 <sup>ぢよ</sup> 神 <sup>えい</sup> 女 <sup>どう</sup> ・永 <sup>ちよ</sup> 貞 <sup>えい</sup> 童 <sup>どう</sup> 女 <sup>ぢよ</sup> マリヤと、

諸 <sup>しよ</sup> 聖 <sup>せい</sup> 人 <sup>じん</sup> を記 <sup>き</sup> 憶 <sup>おく</sup> して、我 <sup>われ</sup> 等 <sup>ら</sup> 己 <sup>おの</sup> の身 <sup>み</sup> 及 <sup>もつ</sup> び互 <sup>なら</sup> に <sup>び</sup> 各 <sup>こと</sup> の身 <sup>ごと</sup> を以 <sup>われ</sup> て、並 <sup>なら</sup> に <sup>び</sup> 悉 <sup>く</sup> の我 <sup>われ</sup> 等 <sup>ら</sup> の

い <sup>の</sup> ち <sup>もつ</sup> 生命 <sup>かみ</sup> を以 <sup>いた</sup> て、ハリス <sup>た</sup> ス <sup>く</sup> 神 <sup>かみ</sup> に委 <sup>いた</sup> 託 <sup>く</sup> せん、



しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) 蓋 <sup>けだし</sup> 、凡 <sup>およ</sup> そ光 <sup>こう</sup> 栄 <sup>えい</sup> 尊 <sup>そん</sup> 貴 <sup>き</sup> 伏 <sup>なん</sup> 拜 <sup>ぢち</sup> は 爾 <sup>こ</sup> 父 <sup>せい</sup> と子 <sup>しん</sup> と聖 <sup>き</sup> 神 <sup>い</sup> に歸 <sup>いま</sup> す、今 <sup>いつ</sup> も何 <sup>よ</sup> 時 <sup>よ</sup> も世 <sup>よ</sup> 世 <sup>よ</sup> に、



アミン。

司祭) 永遠の神、離れたる者を一に合せて、彼等の爲に愛の敗る可からざる結合を定め、  
 イサクとレヴェカとに祝福して、之を爾の許約を継ぐ者と顯しし主や、爾親ら此の  
 爾の奴婢(某)と(某)とも祝福して、之を凡の善行に導き給え、蓋爾は  
 慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世に、



アミン。

司祭) 衆人に平安、



爾のしんにも。  
爾 神

輔祭) 爾等の首を主に屈めよ、



しゅなんぢに。  
主 爾

司祭) 主我等の神、異邦人を以て教會を建て、之を淨き童貞女として己に聘定せし者  
 よ、今の聘定に祝福し、此の爾の奴婢を合せて、之を和平と同心とに守り給え、

蓋凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



アミン。

(司祭は指輪にて3度づつ、新郎新婦を祝福する。指輪を新郎新婦の右手にすこし嵌め、3度交換する。)

司祭) 神の僕(某)、神の婢(某)に聘定せらる、父と子と聖神の名に因りてなり、今も  
 何時も世に、



ア ミ ン。

司祭) 神の僕(某)、神の婢(某)に聘定せらる、父と子と聖神の名に因りてなり、今も  
何時も世々に、



ア ミ ン。

司祭) 神の僕(某)、神の婢(某)に聘定せらる、父と子と聖神の名に因りてなり、今も  
何時も世々に、



ア ミ ン。

司祭) 神の婢(某)、神の僕(某)に聘定せらる、父と子と聖神の名に因りてなり、今も  
何時も世々に、



ア ミ ン。

司祭) 神の婢(某)、神の僕(某)に聘定せらる、父と子と聖神の名に因りてなり、今も  
何時も世々に、



ア ミ ン。

司祭) 神の婢(某)、神の僕(某)に聘定せらる、父と子と聖神の名に因りてなり、今も  
何時も世々に、



ア ミ ン。

しゅわれら かみ たいそ ぼく そのしゅ めあわ つま えら ため つかわ  
司祭) 主我等の神、太祖アウラムの僕、其主イサクに配すべき妻を擇ばんが爲に遣

もの どうこう みづ く するし もつ へいてい しめ  
されし者にメソポタミヤに同行して、水を汲む徴を以てレヴェカの聘定すべきを示し

もの なんぢみづか なんぢ ぼくひ こ こ へいてい しゅくふく かれら たがい  
者よ、爾親ら、爾の奴婢、此の(某)と此の(某)の聘定に祝福し、彼等が互

けいやく ことば かた かれら なんぢ よ せい けつごう もつ かた たま けだしなんぢ  
の契約の詞を堅くし、彼等を爾に因る聖なる結合を以て固め給え、蓋爾は、

はじめ おとこ おんな つく なんぢ よ つま おっと はいぐう これ たす およ じんらい  
始に男と女とを造り、爾に因りて妻は夫に配偶せらる、之を助け、及び人類

けいぞく ため われら かみ しんじつ なんぢ しぎょう つかわ およ なんぢ きやく なんぢ  
を繼續せんが爲なり、我等の神、眞實を爾の嗣業に遣し、及び爾の許約を爾

しよぼく われら ふそ よごと なんぢ えら もの たま しゅ なんぢみづか なんぢ ぼく  
の諸僕たる我等の父祖、世毎の爾の選ばれし者に賜いし主よ、爾親ら爾の僕

(某)と爾の婢(某)とを顧みて、彼等の聘定を信と同意と眞實と愛とに固め

たま けだししゅ なんぢ へいてい するし あた もつ しよじ かた しめ ゆびわ  
給え、蓋主よ、爾は聘定の質を予うるを以て、諸事を堅めんことを示せり、指銀

もつ おい けん あた ゆびわ もつ ち  
を以て、イオシフに、エギプトに於て權は予えられ、指銀を以て、ダニイルはバビロンの地に

おい こうえい え ゆびわ もつ しんじつ あらわ ゆびわ もつ てん いま われら ちち  
於て光榮を獲、指銀を以て、ファマリを眞實は顯れ、指銀を以て、天に在す我等の父

そのこ おんけい あらわ たま けだしい ゆびわ そのみぎ て くわ こ こうし ほふ  
は其子に恩恵を彰し給えり、蓋言う、指銀を其右の手に加え、肥えたる犢を宰り

われらくら たの しゅ なんぢ みぎ て みづか くない うみ おい けんこ  
て、我等食い樂しまんと、主よ、爾の右の手は、親らモイセイを紅の海に於て堅固

にせり、蓋爾が眞實の言にて、天は固められ、地は基けられたり、爾が諸僕の右

て なんぢ けんう ことば なんぢ たか ひぢ しゅくふく ゆえ しゅさい いま なんぢ  
の手も、爾が權能の言と爾が高き臂にて祝福せられん、故に主宰よ、今も爾

みづか てん しゅくふく もつ こ ゆびわ くわ しゅくふく たま ねがわ なんぢ てんし  
親ら天の祝福を以て、此の指銀を加うることに祝福し給え、願くは爾の天使は、

かれら しょうがい かれら さき ゆ  
彼等の生涯、彼等に先だち行かん、

けだしなんぢ ばんじ しゅくふく これ せい しゅ われらこうえい なんぢちち こ せいしん  
蓋爾は萬事に祝福して之を聖にする主なり、我等光榮を爾父と子と聖神に

けん いま いつ よよ  
獻ず、今も何時も世に、



ア ミ ン。

戴冠式

【第127聖詠】

かみ なんぢ さんよう なんぢ さんよう およ しゅ おそ そのみち ゆ もの さいわい  
司祭) 神よ、爾を讚揚す、爾を讚揚す、凡そ主を畏れて、其途を行く者は福なり。



か み よ 、 なん ぢ を さ ん よ う す 、 なん ぢ を さ ん よ う す 、  
 神 爾 讚 揚 爾 讚 揚



か み よ 、 なん ぢ を さ ん よ う す 、 なん ぢ を さ ん よ う す 、  
 神 爾 讚 揚 爾 讚 揚



か み よ 、 なん ぢ を さ ん よ う す 、 なん ぢ を さ ん よ う す 、  
 神 爾 讚 揚 爾 讚 揚

司祭) なん ぢ おのれ て ろう よ くら なん ぢ さいわい なん ぢ ぜん え なん ぢ つま  
 爾 は 己 が 手 の 勞 に 依 り て 食 わ ん 、 爾 は 福 な り 、 爾 は 善 を 得 た り 。 爾 の 妻 は

なん ぢ いえ あ み し げ ぶ とう き ご と なん ぢ し ょ し なん ぢ せ き め ぐ か ん ら ん え だ  
 爾 の 家 に 在 り て 、 實 繁 き 葡 萄 の 樹 の 如 く 、 爾 の 諸 子 は 爾 の 席 を 環 り て 、 橄 欖 の 枝 の

ご と し ゅ お そ も の か ご と こう ふ く し ゅ なん ぢ こう ふ く なん ぢ  
 如 し 、 主 を 畏 る る 者 は 此 く の 如 く 降 福 せ ら れ ん 。 主 は シ オ ン よ り 爾 に 降 福 せ ん 、 爾

ざ い せ い し ょ じ つ あ ん ね い み なん ぢ お の れ こ こ み ね が へ い あ ん  
 在 世 の 諸 日 イ エ ル サ リ ム の 安 寧 を 視 ん 、 爾 は 己 が 子 の 子 を 見 ん 。 願 わ く は 平 安 は イ ズ

ラ イ リ に 歸 せ ん 。

(司祭に続き、新郎新婦、保証人は聖堂中央に進む。  
 伝統的にはここで説教が行われ、次いで以下の問答となる。)

司祭) ( 某 ) よ 、 茲 に 爾 の 前 に 見 る 此 の ( 某 ) を 己 の 妻 と す る 誠 に し て 自 由 な る 望

と 堅 き 決 心 と を 有 っ て 居 り ま す か 、

新郎) も お そん しん ぶ  
 有 っ て 居 り ま す 、 尊 神 父 よ 、

司祭) ほ か お ん な や く そ く あ  
 他 の 女 に 約 束 は 有 り ま せ ん か 、

新郎) や く そ く あ そん しん ぶ  
 約 束 は 有 り ま せ ん 、 尊 神 父 よ 、

司祭) ( 某 ) よ 、 茲 に 爾 の 前 に 見 る 此 の ( 某 ) を 己 の 夫 と す る 誠 に し て 自 由 な る

の ぞ み か た け つ し ん も お  
 望 と 堅 き 決 心 と を 有 っ て 居 り ま す か 、

新婦) も お そん しん ぶ  
 有 っ て 居 り ま す 、 尊 神 父 よ 、

司祭) ほ か お と こ や く そ く あ  
 他 の 男 に 約 束 は 有 り ま せ ん か 、

新婦) や く そ く あ そん しん ぶ  
 約 束 は 有 り ま せ ん 、 尊 神 父 よ 、



輔祭) <sup>きみ しゅくさん</sup> 君よ、祝 讃せよ、

司祭) <sup>ちち こ せいしん くに あが ほ いま いつ よよ</sup> 父と子と聖 神の國は崇め讃めらる、今も何時も世世に、



輔祭) <sup>われらあんわ しゅ いの</sup> 我等安和にして主に禱らん、



輔祭) <sup>うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの</sup> 上より降る安和と我等が 靈 の救 の爲に主に禱らん、



輔祭) <sup>ぜんせかい あんわ かみ せい しよきょうかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの</sup> 全世界の安和、神の聖なる諸 教會の堅立、及び衆 人の合一の爲に主に禱らん、



輔祭) <sup>こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ こころ もつ ここ きた もの たため しゅ いの</sup> 此の聖堂、及び信と 慎 と神を畏る心 とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



輔祭) <sup>きょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう そんき われら せんだい</sup> 教會を 司 る尊貴なる我等の全日本の府主 教ダニイル、尊貴なる我等の仙台の  
<sup>だいしゅきょう しさい そんびん よ ほさいしよく ことごと きょうしゅう およ</sup>  
大主 教セラフィム、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭 職、悉 くの教衆、及  
<sup>しゅうじん ため しゅ いの</sup>  
び衆 人の爲に主に禱らん、



輔祭) <sup>わがくに てんのう およ くに つかさど もの たため しゅ いの</sup> 我國の天皇、及び國を 司 る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) <sup>いまこんばい けつごう もつ たがい あわ</sup>今 婚配の結合を以て <sup>かみ ぼくひ</sup>互に合せらるる神の僕婢( 某 )と( 某 )の <sup>ため およ かれら</sup>爲、及び彼等の

<sup>すくい ため しゅ いの</sup>救の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) <sup>こ こんばい</sup>此の婚配がガリレヤのカナに <sup>お ごと しゅくふく</sup>於ける如く祝福せらるるが <sup>ため しゅ いの</sup>爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) <sup>かれら ていけつ ゆうえき はら み あた</sup>彼等に貞潔と有益なる腹の果との <sup>ため しゅ いの</sup>予えらるるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) <sup>かれら しちよ み え よろこ</sup>彼等が子女を見るを獲て喜ぶが <sup>ため しゅ いの</sup>爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) <sup>かれら しそんおお たのしみ きず すぎわい たまわ</sup>彼等に子孫多き樂と玷なき生度との <sup>ため しゅ いの</sup>賜るが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) <sup>かれらおよ われら およ すくい せつよう きがん じょうじゅ たま</sup>彼等及び我等に凡そ救に切要なる冀願の <sup>ため しゅ いの</sup>成就を賜わるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) <sup>かれらおよ われら もろもろ うれい いかり あやうき まぬが</sup>彼等及び我等が諸の憂愁と忿怒と危難とを <sup>ため しゅ いの</sup>免るるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

輔祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、

諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ なんぢ に 。  
主 爾

司祭) 蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



ア ミ ン。

輔祭) 主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) 至淨なる神、萬物の造成主、人を愛するに因りて、元祖アダムの脅骨を化して女

と爲し、彼等に祝福して、生めよ、殖えよ、地を宰れよと曰い、彼等二人を配偶に依り

て一の者と顯し、蓋是の故に、人は其父母を離れ其妻に着きて、二の者一體と

ならんと曰い、又神の配偶せし者は人分つ可からずと曰い、爾の僕アウラムに祝福

し、及びサツラの胎を開きて多民の父となし、イサアクをレヴェカに賜いて其産に祝福

し、イアコフをラヒリに合せて彼より十二の列祖を出だし、イオシフとアセネファとを配偶

し、彼等に生産の果としてエフレムとマナシヤとを賜い、ザハリヤとエリサヴェタとを容れて、

其産として前駆を顯し、イエッセイの根より、肉體に藉りて永貞童女を生ぜしめ、彼

より人體を取りて人間の救の爲に生れ給い、言い難き恩恵と大なる仁慈とに由りて、

きた かしこ こんばい しゅくふく これ もつ ほう したが こんいん これ よ  
ガリレヤのカナに來りて、彼處の婚配に祝福し、此を以て、法に循う婚姻と之に由

せいさん なんぢ むね しめ しゅ なんぢみづか しせい しゅさい われらなんぢ しよぼく  
る生産との爾の旨なるを示しし主よ、爾親ら至聖なる主宰よ、我等爾が諸僕の

いのり い かしこ お ごと ここ なんぢ み こうりん もつ きた こ こんばい  
禱を納れて、彼處に於けるが如く、茲にも爾の見えざる降臨を以て來りて、此の婚配

しゅくふく なんぢ ぼくひ へいあん どせい ちょうじゅ ていけつ たがい あい  
に祝福し、爾の僕婢(某)と(某)とに、平安の度生・長壽・貞潔・互の愛

わごう いのちなが すえ しぢよ お おんちよう しぼ こうえい かんむり あた たま かれら  
と和合、壽き裔、子女に於ける恩寵、凋まざる光榮の冠を予え給え、彼等に

こ こ み え かれら とこ そしり う まも かれら てん つゆ ち あぶら  
子の子を見るを獲せしめ、彼等の牀を譏を受けざるに守り、彼等に天の露と地の腴とを

たま かれら いえ むぎ さけ あぶら およそ たまもの み これ もと もの あた かれ  
賜い、彼等の家を、麥と酒と油と凡の賜に充てて之を需むる者にも與えしめ、彼

ら とも あ もの およ すくい せつよう きがん じょうじゅ たま  
等と共に在る者にも、凡そ救に切要なる冀願を成就せしめ給え、

けだしなんぢ じれん こうおん じんあい かみ われらこうえい なんぢ なんぢ むげん ちち しせい  
蓋爾は慈憐と宏恩と仁愛との神なり、我等光榮を爾と爾の無原の父と至聖

しじん いのち ほどこ なんぢ しん けん いま いつ よよ  
至仁にして生命を施す爾の神とに獻ず、今も何時も世世に、



アミン。

しゅ いの  
輔祭) 主に禱らん、



しゅあわれめよ。  
主憐

あが ほ かななんぢしゅわれら かみ ひみつ けつじょう こんばい せい しっこうしゃ およ  
司祭) 崇め讃めらるる哉 爾主我等の神、秘密にして潔淨なる婚配の聖なる執行者、及

にくたい こんばい ほうりつしゃ ふきゅう しゅごしゃ せじょう こと ぜん せつりしゃ なんぢしゅさい  
び肉體の婚配の法律者、不朽の守護者、世上の事の善なる攝理者よ、爾主宰

はじめ ひと つく これ ぞうぶつ おう た およ ひとひとりちじょう お よ われかれ  
よ、始に人を造りて、之を造物の王と立て、及び人獨地上に居るは善からず、我彼

ため かれ かな たすけ つく い すなわちかれ わきぼね いつ と おんな つく  
の爲に彼に適える扶助者を造らんと曰い、乃彼が脅骨の一を取りて女を造り、アダ

これ み これ すなわちわ ほね ほね わ にく にく これ おんな な おとこ と  
ム之を見て、是は乃我が骨の骨、我が肉の肉、此は女と名づけられん、男より取り

もの こ ゆえ ひと そのふぼ はな そのつま つ ふたつ ものいつたい  
たる者なればなり、是の故に人は其父母を離れ、其妻に着きて、二の者一體とならん

い なんぢまたかみ はいぐう もの ひとわか べ い しゅ なんぢしゅさいわれら かみ  
と曰い、爾又神の配偶せし者は人分つ可からずと曰いし主よ、爾主宰我等の神よ、

みづか いま なんぢ てん おんちよう こ なんぢ ぼくひ つかわ こ なんぢ  
親ら今も、爾が天の恩寵を此の爾の僕婢(某)と(某)とに遣して、此の爾

ひ ばんじ おい おっと ふく こ なんぢ ぼく つま かしら かれら なんぢ むね  
 の婢に、萬事に於て夫に服し、此の爾の僕に、妻の首とならしめて、彼等に爾の旨  
 かな よ わた たま しゅわれら かみ しゅくふく ごと かれら  
 に適いて世を度らしめ給え、主我等の神よ、アウラムとサツラに祝福せし如く、彼等  
 しゅくふく たま しゅわれら かみ しゅくふく ごと かれら しゅくふく  
 に祝福し給え、主我等の神よ、イサクとレヴェカに祝福せし如く、彼等に祝福し  
 たま しゅわれら かみ ことごと れつそ しゅくふく ごと かれら しゅくふく たま  
 給え、主我等の神よ、イアコフと悉くの列祖に祝福せし如く、彼等に祝福し給え、  
 しゅわれら かみ しゅくふく ごと かれら しゅくふく たま しゅわれら  
 主我等の神よ、イオシフとアセネファに祝福せし如く、彼等に祝福し給え、主我等の  
 かみ しゅくふく ごと かれら しゅくふく たま しゅわれら かみ  
 神よ、モイセイとセプフォラに祝福せし如く、彼等に祝福し給え、主我等の神よ、イ  
 しゅくふく ごと かれら しゅくふく たま しゅわれら かみ  
 オアキムとアンナに祝福せし如く、彼等に祝福し給え、主我等の神よ、ザハリヤとエ  
 しゅくふく ごと かれら しゅくふく たま しゅわれら かみ はこぶね まも  
 リサヴェタに祝福せし如く、彼等に祝福し給え、主我等の神よ、ノイを方舟に護り  
 ごと かれら まも たま しゅわれら かみ くじら はら まも ごと かれら  
 しが如く、彼等を護り給え、主我等の神よ、イオナを鯨の腹に護りしが如く、彼等を  
 まも たま しゅわれら かみ てん つゆ つかわ せい みたり しょうしゃ ひ まも ごと  
 護り給え、主我等の神よ、天より露を遣して聖なる三人の少者を火より護りしが如  
 かれら まも たま ねがわ ふく そんき じゅうじか ほっけん とき え か  
 く、彼等を護り給え、願くは福たるエレナが尊貴なる十字架を發見せし時に獲たる彼  
 よろこび かれら いた しゅわれら かみ きおく ごと かれら  
 の喜は彼等に至らん、主我等の神よ、エノフとシムとイリヤとを記憶せしが如く、彼等  
 きおく たま しゅわれら かみ なんぢ せい よんじゅうにん ちめいしゃ きおく これ てん  
 を記憶し給え、主我等の神よ、爾の聖なる四十人の致命者を記憶して此に天より  
 えいかん つかわ ごと かれら きおく たま かみ かれら よういく ふぼ きおく たま  
 榮冠を遣ししが如く、彼等を記憶し給え、神よ、彼等を養育せし父母をも記憶し給え、  
 けだしふぼ いのり いえ もとい かと しゅわれら かみ こ よろこび あつま なんぢ ぼくひ  
 蓋父母の禱は家の基を固うす、主我等の神よ、此の慶賀に集りたる爾の僕婢、  
 しんこんしゃ とも きおく たま しゅわれら かみ なんぢ ぼく なんぢ ひ き  
 新婚者の友を記憶し給え、主我等の神よ、爾の僕(某)と爾の婢(某)とを記  
 おく かれら ふく くだ かれら はら み ぜんりょう しょし れいたい どうい あた たま かれら  
 憶して彼等に福を降し、彼等に腹の果、善良の諸子、靈體の同意を予え給え、彼等  
 はくこうぼく ごと えだしげ ぶどうじゅ ごと たか たま かれら みのり ゆたか  
 をリバンの栢香木の如く、枝蕃き葡萄樹の如く高うし給え、彼等に穂の豊なるを  
 あた ことごと もとめ た およそ ぜん なんぢ よろこ おこない と たま  
 予えて悉くの需に足らしめ、凡の善にして爾を喜ばしむる行に富ましめ給え、  
 ねがわ かれら そのこ こ そのせき めぐ かんらん えだ ごと み ならび なんぢ よろこ  
 願くは彼等は、其子の子が其席を環ること橄欖の枝の如くなるを見、并に爾の悦  
 ところ こうたい てん お ごと なんぢわれら しゅ あ かがや こうえい けん  
 ぶ所となりて、光體の天に於けるが如く、爾我等の主に在りて輝かん、光榮・權  
 べい そんき ふくはい なんぢ なんぢ むげん ちち いのち ほどこ なんぢ せいしん き いま いつ  
 柄・尊貴・伏拜は、爾と爾の無原の父と生命を施す爾の聖神とに歸す、今も何時  
 よよ  
 も世世に、



アミン。

輔祭) 主に禱らん、



しゅあわれめよ。  
主 憐

司祭) 聖なる神よ、爾は土より人を造り、其脊骨より女を更め造りて、彼に適える

扶助者として彼に配偶せり、蓋爾高大なる神は、此く人の地上に獨居るなからん

ことを喜び給えり、主宰よ、今も親ら爾の聖なる住所より爾の手を伸べて、此の爾

の僕(某)と此の爾の婢(某)とを配偶し給え、蓋爾より妻は夫に配偶せら

る、彼等を同心に結合し、彼等を一體に戴冠せしめ、彼等に腹の果、善良の諸子の

たのしみあたたま  
樂を與え給え、

蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



アミン。

(榮冠にて新郎新婦を祝福し、それぞれ冠らせる。冠持者がある場合は彼等が新郎新婦の頭上に掲げる。)

司祭) 神の僕(某)、神の婢(某)に婚配せらる、父と子と聖神の名に因りてなり、

司祭) 神の婢(某)、神の僕(某)に婚配せらる、父と子と聖神の名に因りてなり、

司祭) 主我等の神よ、彼等に光榮と尊敬とを冠らせ給え、主我等の神よ、彼等に光榮

と尊敬とを冠らせ給え、主我等の神よ、彼等に光榮と尊敬とを冠らせ給え、

輔祭) 睿智、

誦經) プロキメン、其頭に榮冠を冠らし、生命を爾に願ひしに、彼等に賜えり、

そのかしらに、えいかんをこむらし、いのちをなんぢに  
 其頭に、栄冠を冠らし、生命を爾に  
 ねがいしにかれらにたまえり。  
 願彼等に賜えり。

誦經) なんぢ かれら こうふく よよ たま なんぢ かんばせ よろこび かれら たのし  
 爾は彼等に幸福を世に賜い、爾が顔の歡にて彼等を樂ませり、

そのかしらに、えいかんをこむらし、いのちをなんぢに  
 其頭に、栄冠を冠らし、生命を爾に  
 ねがいしにかれらにたまえり。  
 願彼等に賜えり。

誦經) そのかしら えいかん こうむ いのち なんぢ  
 其頭に栄冠を冠らし、生命を爾に

ねがいしにかれらにたまえり。  
 願彼等に賜えり。

輔祭) えいち  
 睿智、

誦經) せいしと じん たつ しょ よみ  
 聖使徒パウエルがエフェス人に達する書の讀、

輔祭) つし き  
 謹みて聽くべし、

誦經) けいてい およそ こと つね われら しゅ な よ かみちち かんしゃ  
 兄弟よ、凡の事、常に我等の主イイススハリストスの名に因りて、神父に感謝せよ。

かみ おそ ところ もつ たがい したが つま おのれ おっと したが しゅ お ごと  
 神を畏るる心を以て互に順え。婦よ、己の夫に順うこと、主に於けるが如く

せよ、 けだしおっと つま かしら きょうかい かしら ごと かれ またからだ  
 蓋夫は婦の首たること、ハリストスが教會の首たるが如し、彼は亦體の

きゅうしゅ すなわちきょうかい したが ごと か つま およそ こと おい おっと  
 救主なり。乃教會のハリストスに順うが如く、斯く婦も凡の事に於て夫に

したが おっと おのれ つま あい きょうかい あい ごと かれ  
 順うべし。夫よ、己の婦を愛すること、ハリストスが教會を愛するが如くせよ、彼

おのれ これ ため す これ みづ せん もつ ことば よ きよ せい ため これ  
 は己を此が爲に捨てたり、是を水の洗を以て、言に由りて、潔めて聖にせん爲、是を

おのれ まえ こうえい きょうかい けがれあるい しわ あるい か ごと たぐい もの た ため  
 己の前に光榮なる教會、汚或は皺、或は此くの如き類なき者として立てん爲、

すなわちこれ せい きず もの ため おっと おのれ つま あい おのれ み  
 昂 是が聖にして疵なき者とならん爲なり。夫は己の婦を愛すること、己の身の  
 ごと おのれ つま あい もの おのれ あい ひといま おのれ み にく ものあ  
 如くすべし、己の婦を愛する者は、己を愛するなり。人未だ己の身を惡む者有ら  
 ず、乃之を養い、是を温むること、主の教會に於けるが如し、蓋我等は彼の  
 からだ えだ かれ にく かれ ほね こ ゆえ ひと そのふぼ はな そのつま つ  
 體の肢にして、彼の肉よりし、彼の骨よりす。是の故に人は其父母を離れ、其妻に著  
 きて、二の者一體とならん。此の奥義は大なり、我はハリストスと教會とに於て之  
 い しか なんぢらおのおのそのつま あい おのれ ごと しこう つま そのおっと  
 を言う。然らば爾等各其婦を愛すること、己の如くすべし、而して婦は其夫を  
 おそ  
 畏るべし。

司祭) 爾に平安、

誦經) 爾の神にも、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、

輔祭) 睿智、



ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 。

誦經) 主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、斯の世より永遠に至らん、



ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 。

輔祭) 睿智、肅みて立て、聖福音經を聴くべし、

司祭) 衆人に平安、



なんぢのしんにも。  
 爾の神

司祭) イオアン傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいはなんぢにきす。  
 主 光 榮 は 爾 に 歸 し 、 光 榮 は 爾 に 歸 す 。



司祭) 彼の時、ガリラヤのカナに婚筵あり、イイススの母も彼處に在りき。イイスス及び其門徒

も亦婚筵に招かれたり。酒の乏しきに因りて、イイススの母之に謂う、彼等に酒なし。

イイスス曰く、婦よ、我と爾と何ぞ與らん、我の時未だ至らず。其母諸僕に謂う、

彼が爾等に命ずる所を行え。彼處にイウデヤ人の潔の例に従いて、石の水甕

六あり、各二三斗を容る。イイスス諸僕に謂う、甕に水を満たせ。之に満たして、幾

ど溢る。又彼等に謂う、今挾みて、司筵者に遞れ。乃遞れり。司筵者は酒に變じた

る水を嘗めて、(其奚れよりするを知らざりき、唯水を挾みし諸僕之を知れり、)新娶者を

呼びて、彼に謂う、凡の人は先づ旨酒を進め、酎なるに及びて、魯酒を進む、爾

は旨酒を留めて今に至れり。是くの如くイイススガリラヤのカナに於て休徴の始を

立てて、其光榮を顯せり、其門徒彼を信ぜり。



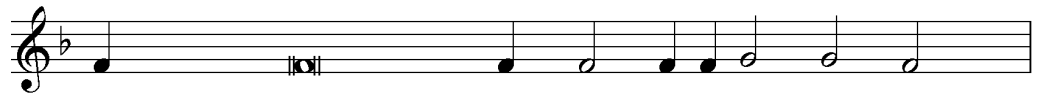
しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいはなんぢにきす。  
主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮 爾 歸

輔祭) 我等皆靈を全うして曰わん、我等の思を全うして曰わん、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

輔祭) 主全能者、吾が列祖の神よ、爾に禱る聆き納れて憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

輔祭) 神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

輔祭) 又神の僕婢(某)と(某)に慈憐、生命、平安、壮健、救贖、眷顧を賜わ

んが爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) 蓋 爾 は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾 父と子と聖 神に獻ず、今も  
いつ よよ  
何時も世に、



ア ミ ン。

輔祭) 主に禱らん、



しゅあわれめよ。  
主 憐

司祭) 主我等の神、爾が救を施す攝理に於て、ガリレヤのカナに、爾の來臨を以て婚  
配の尊きを顯しし者よ、親ら今、爾の僕婢(某)と(某)と、爾が甘じて  
互に配偶せしめし者を和平と同心とに保ち、其婚配を貴き者として彰し、其牀  
を汚なく守り、其配偶の永く玷なきを致し、彼等に潔き心を以て爾の誠を  
行いて、高齡に至らしめ給え、

蓋 爾 は我等の神、憐を垂れ救を施す神なり、我等光榮を爾と爾の無原  
の父と至聖至善にして生命を施す爾の神とに獻ず、今も何時も世に、



ア ミ ン。

輔祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅあわれめよ。  
主 憐

輔祭) 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



しゅ た ま え よ 。  
主 賜

輔祭) へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしゃ たま しゅ もと  
平安の天使、正しき教師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む



しゅ た ま え よ 。  
主 賜

輔祭) われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと  
我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



しゅ た ま え よ 。  
主 賜

輔祭) われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと  
我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



しゅ た ま え よ 。  
主 賜

輔祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと  
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



しゅ た ま え よ 。  
主 賜

輔祭) われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ  
我等の生命の終がハリストティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハ  
リストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



しゅ た ま え よ 。  
主 賜

輔祭) しん どういつ せいしん たいごう もと われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならば  
信の同一と聖神の體合とを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、并

に ことごと われら いのち もつ かみ いたく  
悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) しゅざい われら いきみ もつ つみ え あえ なんぢてん かみちち よ い たま  
主宰よ、我等に勇を以て、罪を獲ずして、敢て爾天の神父を籲びて言うを賜え、

てんにいますわれらのちちよ、ねがわくはなんぢのなはせいとせられ、  
 天 在 我 等 父 よ、願 爾 名 聖

なんぢのくにはきたり、なんぢのむねはてんにおこなわるるがごとくちにも  
 爾 國 來 り、爾 旨 天 行 如 地

おこなわれん。わがにちようのかてをこんにちわれらにあたえたまえ。  
 行 我 日 用 糧 今日 我 等 與 給

われらにおいめあるものをわれらゆるすがごとく、われらのおいめを  
 我 等 償 者 我 等 免 如 我 等 償

ゆるしたまえ。われらをいざないにみちびかず、なおわれらを  
 免 給 え 我 等 誘 導 猶 我 等

きょうあくよりすくいたまえ。  
 凶 惡 救 給

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こせいしん き いま いつ よよ  
 蓋 國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

アミ ン。

司祭) しゅうじん へいあん  
 衆 人に平安、

なんぢのしんにも。  
 爾 神

輔祭) なんぢら こうべ しゅ かが  
 爾等の首を主に屈めよ、

しゅ なんぢに。  
 主 爾

輔祭) しゅ いの  
 主に禱らん、



しゅあわれ めよ。  
主 憐

司祭) 神、爾の權能を以て萬物を造り、世界を固め、凡の爾に造られし者の榮冠を

飾り、竝に婚配の結合の爲に配偶する者に此の合 誓を賜う主よ、屬神の

祝福を以て之に祝福し給え、

蓋爾父と子と聖神の名は讚揚せられ、爾の國は讚揚せらる、今も何時も世に、



アミ ン。

(司祭は葡萄酒を満たした盃を持ち、新郎新婦に3度づつ飲ませる。

新郎新婦は互いに手を繋ぎ、司祭はそれにエピタラヒリを乗せて持つ。司祭は新郎新婦を引いて聖台を3回廻る。冠持があれば冠を掲げたまま一緒に廻る。新婦の裾が長い場合等は保証人等が持って一緒に廻る。新郎新婦がローソクを持ち辛かったら保証人等に預けて良いです。)

司祭) イサイヤ<sup>よろこ</sup> 慶べよ、



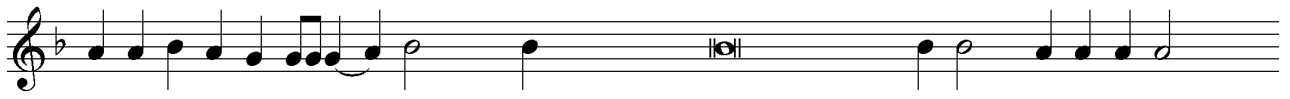
イサイヤ<sup>よろこ</sup> 慶べよ、きよきしよじよは、みごもりてこ



エマヌイルをうむ。かみとひととなるもの、ひがし



その名は。かれをあげてしよじよをほめうと



せいなるちめしやは、よくなんをうけてえい冠をこおむるもの。



しゅにいのりたまえ、わがたましいをすくわんことを。



ハリストス<sup>神</sup> みや、なんぢをさんよ<sup>うす</sup>。しと<sup>の</sup>ほまれ、ちめい<sup>致命</sup>



しやのよろこびよ。かれらのおしえはいつたいのさんしゃなり。  
 者悦 彼等 の教 一體 三者

司祭) 新郎よ、願くは爾、アブラアムの如く尊大となり、イサクの如く福を受け、イ  
 アコフの如く殖え、平安に世を渡りて、正しく神の誠を守らんことを。

司祭) 新婦よ、願くは爾も、サツラの如く尊大となり、レヴェカの如く樂み、ラヒリの如  
 く殖え、爾が夫の爲に樂みて、法の界を守らんことを、蓋神は若く望み給えり。  
 (司祭は新郎新婦の榮冠を取って祝福する。)

輔祭) 主に禱らん、



しゅあわれめよ。  
 主憐

司祭) 神・我等の神ガリレヤのカナに臨みて彼處の婚配に祝福せし主よ、爾の慮に  
 因りて婚配の結合の爲に配偶せし、此の爾の僕婢にも祝福し給え、彼等の出入  
 に福を降し、彼等に多福にして壽きを賜え、彼等の榮冠を爾の國に納れ、之を  
 汚なく玷なく謗なくして世々に護り給え、



アミン。

司祭) 衆人に平安、



なんぢのしんにも。  
 爾神

輔祭) 爾等の首を主に屈めよ、



しゅなんぢに。  
 主爾

司祭) 願くは父・子及び聖神、至聖にして一體なる生命を施す三者、唯一の神性と國  
 とは爾等に祝福し、爾等に長き命、善良の諸子、生命と信仰との進を賜い、

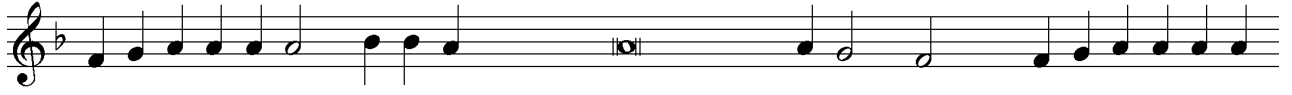
なんぢら およそ ちじょう さいわい あ なんぢら またきよやく ふらく う た もの  
爾等に凡の地上の福を充て、爾等を亦許約せられし福樂を受くるに堪うる者

な たま せい しょうしんぢよ しょせいじん きとう よ  
と爲し賜わん、聖なる生神女と諸聖人との祈禱に因りてなり、



アミン。

輔祭) 睿智、



ヘルヱムよりと うとくセラフムにならびなくさか え、みさおをやぶ  
尊 並 榮 貞操 壊

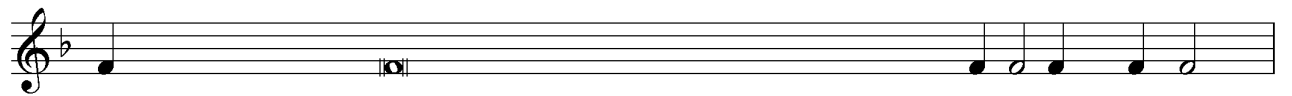


らずしてかみことばをうみ し、じつのしよ うしんぢよたる な んぢを  
神 言 生 實 生 神女 爾 ぢを

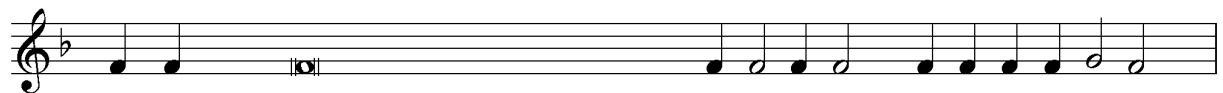


あがめほむ。  
崇 讚

司祭) ハリストス神、我等の恃よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、



こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光 榮 は 父 と 子 と 聖 神 に 歸 す、 今 も 何 時 も 世 世 に、 ア ミ ン。



しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ ふく くだ  
主 憐 め、 主 憐 め、 主 憐 めよ、 福 を 降 せ。

司祭) ガリレヤのカナに、己の降臨を以て婚配の尊きを表しハリストス、我等の眞の

かみ そのしじょう はは こうえい さんび せいしと かみ たいかん せいおう あ  
神は、其至淨なる母、光榮にして讚美たる聖使徒、神より戴冠せられたる聖王・亜

しと およ せいだいちめいしゃ およ しょせいじん きとう よ  
使徒・コンスタンティン及びエレナ、聖大致命者プロコピイ、及び諸聖人の祈禱に由り

われら あわれ すく かれ ぜん ひと あい しゅ  
て我等を憐み救わん、彼は善にして人を愛する主なればなり、



アミン。

輔祭) 主よ、今茲に婚配せらるる神の僕婢(某)と(某)に、萬福にして平安なる度生、

そうけん きゅうしょく けんこ かんゆう およ ばんじ お よ しんぼ あた かれら いくとせ まも  
 壮健、救贖、堅固、寛宥、及び萬事に於ける善き進進を與え、彼等を幾歳にも守

たま  
 り給え、

いくとせも いくとせも いくとせも  
 いくとせも いくとせも いくとせも  
 いくとせも いくとせも いくとせも  
 いくとせも いくとせも いくとせも  
 いくとせも いくとせも いくとせも  
 いくとせも いくとせも いくとせも

(「幾歳も」が歌われ始めたら新郎新婦は司祭に付いて前に進み、王門脇の聖像に接吻する。新郎は右のハリストスの聖像、新婦は左の生神女の聖像に。その後、王門前にて新郎新婦は互いに接吻し、参拝者に挨拶する。)